

ビッグ・テックや業界をリードしてきた先進的なAI開発企業は、AIモデルをクローズ化する傾向にある。AIモデルに巨額の開発資金を投じるため詳細な技術仕様は知的財産として厳格に管理され、ユーザーは、ブラックボックス化したAIモデルにAPIを介してアクセスし、サービスを構築するという状況が一般化しつつある。

一方、技術仕様をより広く公開したオープンなAIの機能レベルが、2024年後半以降、クローズドなAIにキャッチアップした。Llama 3.1、DeepSeek v3 (R1)、Qwen2.5といった高性能でオープンなAIモデ

ズドなAIモデルとの差が縮まれば縮まるほど、業界をリードしてきた先進的な企業が巨額の投資をして最先端のAIモデル開発に挑戦するインセンティブは低下してしまう。結果として、AI技術全体の進歩が停滞する可能性がある。

ただ、こうした懸念を払しょくするような新たなトレンドが生まれつつある。大規模なAIモデルは高度な処理を実現する一方で、特定の用途に絞った小規模なAIモデルでも実用的な性能を発揮できることが分かってきたからである。高性能な大規模AIモデルと、目的

## 数 | 理 | の | 窓

### 岐路に立つ生成AI市場



ルである。先進的でクローズドなAIモデルのリリースから、オープンなAIモデルのリリースまで6~12か月遅れと言われていたが、現在では3~6か月程度までに縮まったという声もある。

安価で利用できるこれらのオープンなAIモデルをベースに、日本語や業界特有の用語などのドメイン知識を追加学習した多様なAIモデルがベンチャー企業や個人などによって作られ、様々なサービスに応用されているのはご承知のとおり。多様な参加者による創意工夫は、既存の枠組みでは生まれることがなかった革新的なアイデアやサービスを生み出す可能性を秘めている。

しかし、こうした展開は新たな課題を引き起こす恐れがある。オープンなAIモデルの性能が向上し、クロー

に応じて最適化された小規模AIモデルを使い分けるという現実的な選択が広がっている。

このような状況は、AIの開発における新たな均衡点を示唆している。先進企業は莫大なリソースを投じて最先端の大規模AIモデルの開発を進め、技術的な限界に挑戦し続ける。それらの最先端のAIモデルは先端を走ることが重要な分野で活用される。その一方で、オープンなAIモデルはキャッチアップした技術を基に、多様な参加者を巻き込み、多様な用途に最適化された小規模モデルが開発されていく。このような補完的な関係が自然と形成されることで、技術革新のインセンティブを維持しつつ、AIの恩恵は広く社会に行き渡るのはないだろうか。  
(金子 洋平)